Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

自然主義と道徳--正宗白鳥の初期作品をめぐって

木村，洋

(Citation)
國文論叢,44:51-65

(Issue Date)
2011-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003344

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003344

自然主義と道徳

——正宗白鳥の初期作品をめぐって——

木村　洋

一

内面を報告すること、あるいはそれを吟味し、攻撃者に対して擁護することは、日露戦争後の数年間に興隆する自然主義運動の中心的な関心事だった。たとえばこの運動の担い手の一人だった片上天弦は、「一代の人心が、再び青年の心に還つて、その若き心を表白せんとするところに、必ず自然主義の文学は勃興する」（「未解決の人生と自然主義」『早稲田文学』27号、一九〇八年二月）と述べているが、このような内面の開示への関心は、「告白」をめぐる文壇の動きを見ても明らかである。以前に筆者は、とくに一九〇六年前後に顕在化する宗教熱から自然主義の隆盛へと至る過程で、「告白」という不穏な実践を促し、吟味する場として文壇が機能していくことを跡づけたが[1]、ここではそのように内面の開示に意義を見出だしていく動きを別の角度から追跡し、この史的展開をいっそう鮮明にしたい。対象とするのは初期の正宗白鳥をめぐる動向である。

白鳥（一八七九年生まれ）は自然主義運動の興隆期に新しい世代の小説家として急速に評価を高めた。白鳥が初の作品集『紅塵』（彩雲閣、一九〇七年九月）を刊行する頃には、すでに「著者今や独歩氏等と相駢んで文壇の一角を劃占して動かず」（無署名「新著梗概」『読売新聞』一九〇七年一〇月八日）という地位にあり、第二作品集『何処へ』（易風社、一九〇八年一〇月）の刊行に及んで、早稲田文学記者「推讃之辞」（『早稲田文学』39号、一九〇九年二月）が、この作品集を島崎藤村『春』（『東京朝日新聞』一九〇八年四月七日～八月一九日）とともに称えたことはよく知られている。このような手厚い待遇ぶりは、白鳥の小説が当時の文学動向の先端にいた者たちの期待によく応える形で現れたことの証左である。

注目したいのは、白鳥の小説が、内面の報告・吟味に意義を見出していく当時の文壇の動きに加勢する形で現れたことである。たとえば、のちに本論で詳しく検討する初期の白鳥の代表作「何処へ」（『早稲田文学』26～29号、一九〇八年一～四月）は次のように評価されていた。「健次（「何処へ」の主人公、木村注）其の人は（中略）人生の寂寞を感じ、厭世的思想を抱いたのである。

これ実に今日の人間が胸中を代表したものではあるまいか」（長谷川天渓「近時小説壇の傾向」『太陽』14巻2号、一九〇八年二月）。このように「何処へ」は、臨場感にみちた内面（「今日の人間が胸中」）の再現に大きな魅力を有しており、後述のように白鳥自身もその表現にきわめて自覚的だった。ではいったい何がこのような模索を促したのか。

そのことを理解するために必要なのは、同時期のある時評で言及されている、「自然主義対道徳」（後述）という状況を考慮することである。ここで「道徳」という言葉は、日露戦争以前から騒々しい情勢を作りあげていく教育家および教育行政の動向を意味する。注意したいのは、一見文学史の展開と縁遠いかに見えるこの動向のなかで、小説の愛読者たる青年たちの内面が持続的な攻撃の対象となり、その処遇をめぐって文壇の担い手たちとのあいだで激しい対立を生み出すことである。同時期に白鳥が青年の内面という主題に拘り、その表現に腐心する経緯、またその試みが当時の文壇人たちに意義深い試みとして歓迎される経緯も、この「道徳」の陣営との対立という情勢と密接に関わっていたと考えられる。本論は、従来関心が向けられることが少ないこの様相に着目することで[2]、なぜ当時の文学が内面の表現において緊迫した展開を生み出したかを明確にすることを目標としている。

二

では正宗白鳥は「道徳」をめぐる動向といかに関与していたのか。

初期の白鳥の発言を通時的に追っていくとき、「道徳」という言葉が多様な文脈で用いられていることが分かる。たとえば「『梁川文集』を読む」（『読売新聞』一九〇五年七月三〇日、署名剣菱）では、宗教・教育問題の有力な発言者だった綱島梁川の著書について「現世的の小道徳常識的人生観に満足」しない態度を称えており、「宗教問題」（同紙、一九〇六年五月一～二日、署名白鳥）では、「平凡道徳に満足して、其の埒外に出づるを恐るゝ教育家ハ、（中略）哲学書を禁じたり、小説を禁じたり、青春の女子を牢獄のやうな寄宿舎に押込め、前世紀の道徳倫理でこれを律せんとする」と当時の教育家を非難する。

こうした言明は、冒頭でもふれたように、当時の教育家および教育行政をめぐる動向と対応している。白鳥がこの動向に注意を向けていた理由は、学生風紀問題と呼ばれた議題の浮上と関わっている。これは、青年男女の「風紀」「風教」の乱れ（堕落、煩悶、自殺、個人主義的傾向など）の原因や処方箋をめぐって持続的に論議された、一九〇〇年代の言論界の一大争点だった。たとえば長谷川天渓は次のように述べている。「四五年此の方、学生風紀問題の絶えたることなし。殊に近頃に至りては、呼び声嚣々として聾せむばかり也。不良学生、堕落女学生等を取締るべし、卑猥なる書籍を読ましむること勿れ、小説購読を禁ぜよ、曰はく何々と」（「狗尾続貂」『太陽』12巻11号、一九〇六年八月）。この発言からも学生風紀問題が一九〇〇年代の言論界において持続的な論議の対象だったことが分かるが、同時に注意したいのは、学生の風紀を乱す主な原因として小説が名指されていたことである。ではそのような発言とはいかなるものなのか。いくつか拾いあげてみよう。

・自分は今日の小説が青年男女に及ぼす悪結果は決して狭い範囲ではなく、其悪影響の分量も少くはなく、大なるものであると考へて居るのである、（沢柳政太郎〔文部次官〕「倫理上二三の実際問題」『丁酉倫理会倫理講演集』28、一九〇五年一月）

・近来神経的の小説に耽つて自らも神経的となり、遂に病的となり、次第に悲観的の観念を生じて煩悶に堪へないと云ふやうなものも少くないのである、（井上哲次郎〔東京帝国大学文科大学教授〕「青年の煩悶と宗教思想」『東亜の光』1巻1号、一九〇六年五月）

・たとへば一知半解の厭世論、本能満足論、懐疑説、乃至は凡人本位の小説などが、この（自分本位の煩悶の、木村注）ジャスティフィケーションの道具に使はれることがある。（特集「文相訓令に対する意見」での坪内雄蔵〔逍遙、早稲田大学講師〕の発言、『早稲田文学』10号、一九〇六年一〇月）

・『小説』も日本に現今賞讃されて居るものは成程文章の巧妙なものはあるが、大体の着想が頗る卑俗で、而も風儀上教育上如何はしい者が多い、（下田次郎〔女子高等師範学校教授〕の談話、無署名「女学生の読物」『教育時論』776号、一九〇六年一一月）

・（前略）盲目的な本能満足主義、此れから生ぜられる文学（中略）は趣味を養ふでもなく、美を楽むでもなく、無功有害で最も禁歇防止に勉めなければならぬ所であることは今更ら言ふ迄もない、（中島徳蔵〔私立東洋大学講師〕「文芸と道徳」『丁酉倫理会倫理講演集』55、一九〇七年四月）

・現代の小説を読むことは、学生諸君に勧める訳に行かぬ。（中略）その時代の欠陥を、目前に彷彿せしめて、青春に富める読者をして徒に神経過敏に流れしむるからである。（三輪田元道〔三輪田高等女学校教頭〕「将来の小説及演劇」『東京日日新聞』一九〇七年五月二〇日）

・世は社会風教の頽敗を慨嘆し男女学生の堕落を絶叫しつゝあるが、（中略）確に文学界に於ける自然主義も亦其原因の一に数ふべきものである。（塚原政次〔広島高等師範学校教授〕「自然主義の傾向と道徳」『丁酉倫理会倫理講演集』64、一九〇八年一月）

このように文部次官の沢柳政太郎や井上哲次郎・坪内逍遙をはじめとした倫理学者・教育家たちは、一様に小説とその読者たる青年を非難していた。ここで注目したいのは、最後に引用した記事に「自然主義も亦其原因の一に数ふべきものである」とあるように、この学生風紀問題が自然主義の興隆へと直結していく重要な文脈を形づくっていたことである。ではそのような状況へと至る推移とはいかなるものなのか。

この点で重要なのは、とくに一九〇六年からの教育界の動きである。この年、青年たちの煩悶や自殺が言論界の中心的な論点として浮上し、それと連動する形で綱島梁川たちの言動によって引き起こされた青年層の宗教熱が話題になるとともに、六月九日、文部大臣牧野伸顕によって文部省訓令第一号が発せられる。これが先述の学生風紀問題の論議を受けたものだったことは、「学生生徒ノ風紀振粛ニ関スル件」という標題をもち、「青年子女」の

「風紀頽廃」の要因として「就中近時発刊ノ文書図書」を名指し、非難するという、当時の教育家たちに倣う主張を内包することからも明らかである。この訓令を契機として小説排斥の気運がいっそう高まることは後述するが、これをふまえて組まれた雑誌『新公論』の特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」（21年7～9号、一九〇六年七～九月）はとりわけ衆目を集めた。[3]

翌一九〇七年は、前年の論議を引き継ぐ形で「道徳」と文学の対立がこれまで以上に緊迫した形勢を作りあげた時期にあたる。とくに、「現代の主なる倫理学者を殆んど網羅して残す所なきやの観あり」（無署名「女性に関する二論文」『新人』6巻3号、一九〇五年三月）と目されていた丁酉倫理会の機関誌『丁酉倫理会倫理講演集』[4]上で文学への攻撃が集中的に行われ、一方、長谷川天渓・島村抱月たちによって相次いで文学擁護論が発表されるなど、[5]「道徳」と文学の両陣営のあいだで活発な応酬が見られた。また文壇内でも、その年の後半期にいわゆる性欲問題・モデル問題がもちあがり、自然主義が、性欲を忌憚なく描き、友人の私行を暴くことをも辞さないような反社会的な潮流として認知されていく。この一連の展開によって構築されたのが、自然主義運動の有力な担い手だった相馬御風の言う「自然主義対道徳」（「自然主義と道徳」『新声』18編1号、一九〇八年一月）という対立の構図である。

従来あまり強調されていないが、自然主義運動の勃興がこのように日露戦争以前からの学生風紀問題をめぐる論議の延長戦というべき側面をもっていることは注目に値する。「道徳」への異議を唱える先の白鳥の記事がこうした言論界の状況と対応しているのは明らかだろう。現に白鳥は文部省訓令と『新公論』の特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」について複数の言及を残している。[6]注目したいのは、白鳥がこうした「道徳」をめぐる動向との関連から文学言語の社会的役割を考慮していたことである。そのことは同時代の小説家の評価の仕方からも窺われる。尾崎紅葉と夏目漱石への評を見てみよう。

・これは旧道徳旧人情旧趣味旧文辞が巧みに紅葉の作に含まれてゐるからで、四十歳以上の人は同気相求むの道理から彼れの作中に自己の好みを認めるのだ。（白鳥「紅葉山人」、特集「明治故人評論（四）　尾崎紅葉論」『中央公論』22年8号、一九〇七年八月）

・その人生に対する考へは一種の道学先生である、「野分」や「二百十日」を見れば常識的道徳小説の臭ひが漲つてゐる。（中略）氏の作を見ると、氏は与へられたる道徳に跼蹐してる人で、今の家庭小説家と多く異る所がない。（同「夏目漱石論」、特集「現代人物評論（二）　夏目漱石論」『中央公論』23年3号、一九〇八年三月）

尾崎紅葉や夏目漱石への白鳥の不満は、その小説に「道徳」への反発が見られないことと関わっていた。別言すれば、白鳥において文学とは「道徳」の陣営への対抗的な構えを率先して構築すべき場だったと言える。このように初期の白鳥が強く意識していたのは、小説の読者たる青年たちを口々に指弾する教育家および教育行政の動向であり、この動向に対する態度という観点においてどの小説が信頼に価するかが判別されていた。この意識、つまり、教育界と文学という二つの領域の動きを同じ視野のなかに収

めつつ、あくまであるべき小説を、教育界の動きに対抗する反「道徳」的な実践として設定しようとする意識は、当然ながら白鳥自身の創作をも深く規定していたはずである。次にそのことを見ていきたい。

三

正宗白鳥の小説が「道徳」の陣営の動きに対して対抗的な姿勢を強めていく形で胚胎していくことは、作中における青年とその指導者たる人物の扱い方からも明らかである。たとえば「旧友」（『新小説』11年9巻、一九〇六年九月）に登場する牧師は、世話をした青年たちを一向に「真の信者とはなし得な」いまま敗残の日々を送る人物として現れるし、「安心」（『趣味』2巻6号、一九〇七年六月）では、つねづね尊敬していた牧師が病床で「淫猥極まる」寝言を言い、たまたまそれを聞いた青年が「説教」よりも「大なる慰藉」を得るという内容が語られる。とくにこうした青年とその指導者のあいだの不和や隔たりをいっそう徹底した形で描いた試みとして現れたのが「何処へ」（前掲）である。以下、本論は「何処へ」を重点的に検証したい。

「何処へ」は雑誌記者、菅沼健次の数日間の日常をめぐって展開するが、ほとんど事件らしい事件は起こらない。一応のあらすじは、健次とその友人の織田の妹とのあいだに縁談がもちあがるものの、健次の消極的な態度ゆえに、箕浦（健次の別の友人）が織田の妹を娶ることに決まるというものである。本論の関心においてとくに重要なのは、健次が取材のために恩師にあたる大学教授の桂田博士を訪問する場面である。この人物は健次に次のように語りかける。

どうも君は真面目でない、今から読書を卑しむやうぢや、人間は発達の見込がないと断言出来る、これから国家に尽くさうといふ青年が、こんな浮薄な根性を持つてゝどうします、碌に読書もせんで書物を軽んじたり、人間の義務を満足に尽しもしないで、世の中を攻撃したり、大間違ひの話ぢやないか、しかしこれも今の雑誌や文学が作つた悪結果の一つだらう。どうも軽佻だ、浮薄だ、過渡期には免かれんことだが、武士道の精神も衰へるし、新倫理観が青年の間に欠乏してゐるから、こんな歎かはしい現象が起る。して見ると私なども進んで積極的に救済策を講ぜねばなるまい、（中略）今の青年の通弊を見ると、どうも社会の為国家の為に黙々に附してゐらん、私も当面の問題について飽まで意見を発表しなければなるまい（26号29〜30頁）

注意したいのは、ここで健次が置かれる立場、つまり、「今の雑誌や文学が作つた悪結果」、武士道という美徳にもとる存在、「救済策」を講ずべき対象、国益に背く成員（「国家の為に」云々）として、多様な角度から指弾されるという立場が、同時代の青年たちにもあてはまることである。（なお健次の父親も「武士道の精神が衰へる」ことを嘆く人物として作品に登場する。）そのことは前節でふれた当時の教育界の動向と照合することで明瞭となる。まず健次を含めた青年たちが「救済策」を講ずべき対象とされることは、先述の『新公論』の特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」（21年7号の副題は「厭世と煩悶の救治策」）を想起させる[7]。さらに、「文学」の「悪結果」として健次の

素行を批判するというふるまいが、これまで見たような同時期の小説排撃論に倣っていることは明らかである。また桂田博士は健次を「どうも社会の為国家の為に黙々に附してゐらん」と、国益に背く存在として非難するが、「国家の為」という言辞は次に示すように当時の青年の攻撃者たちの常套語だった。

・此の思想（青年の厭世思想、木村注）の普及して時代思想とならむには、国家の為め実に由々しき一大事なり。（山根正次〔政治家〕、先述の特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」）

・（前略）今回の訓令が（中略）戦後日本の国是と、相背馳する如き形式を取りて青年界に臨む事も有らば、国家の為め由々敷次第なりと、心窃かに憂慮しつゝある者で有る。（雷軒「青年の意気」『丁酉倫理会倫理講演集』46、一九〇六年七月）

・徒らに己の材能を夸大視する時は（中略）国家の為めにも亦大に惜まざるを得ないのである。（松本文三郎〔京都帝国大学教授〕「煩悶と自殺」『新小説』11年11巻、一九〇六年一一月）

先の桂田博士の「国家の為」云々という発言こそは、こうした青年の攻撃者たちの発言を反復したものにほかならない。その画一性は、すでに波多野精一（早稲田大学講師）によって「今日の教育家の多くの如く、「国家の為」と叫んだ丈けで、此の弊を除かうとするのは余りに浅薄だと思ふ」（特集「文相訓令に対する意見」『早稲田文学』前掲）と批判されていた。付言しておくと、桂田博士における武士道への信頼も当時の青年の攻撃者たちの言動と対応している。[8] 以上から明らかなのは、先の桂田博士の発言が同時代の言論を覆った「道徳」の鼓吹者たちの発言群の簡明な要約というべきものだったことである。

健次の訪問の目的にも注意しよう。健次は、桂田博士の談話を雑誌の記事にするためにその邸宅に訪れている。この記事の内容は、健次が「ぢや私の雑誌へも、そのお考へを書いて頂けますまいか」と返答するように、まさに健次を前にして語られた先の青年批判に決定する。そのことは、桂田博士が文学と「道徳」の対立（「自然主義対道徳」）という言論の構図が浮上していく動きに、「道徳」の陣営の一員という立場から参与していた人物として作中に登場していることを示しているだろう。[9]

重要なのは、このように教育家との軋轢に着目することが、青年の内面という主題の浮上と結びついていたことである。たとえば桂田博士が健次の「浮薄な根性」を非難したように、あるいは当時の「道徳」の鼓吹者が青年たちの「一知半解の厭世論、本能満足論、懐疑説」を攻撃したように、青年の内面は救治されるべき害悪として見出され、攻撃された。しかしこの状況は別の動きを促進させることにもつながったはずである。すなわち、自身の内面が部外者によって一方的に害悪視されることへの反発を青年層のあいだに増大させたはずであり、さらにこの状況は、自身の内面を当事者の立場から改めて語ろうとする衝動を喚起させたと考えられる。現に白鳥は「何処へ」発表の直前に次のように述べていた。

去年文相の訓令があり、それから諸先輩の煩悶救治策が現はれ、吾人は彼等の考のあまりにお目出度のを滑稽に感じたが、

今日の青年の間に一種の暗い思想が湧きつゝあるのは争ふべからざる事実だ。（中略）数年前のニーチェ鼓吹や美的生活論はまだ呑気なもので、雷同者の多くは酒を呑んで浮かれる位の量見であつたであらうが、今日少数の青年の頭にある者はもつと意味が深い。今年雷同者や盲目的反対音の多かつた自然主義も、これを広く深く進めたならばどうであらう。

（「虚無思想の発芽」、特集「明治四十年文壇の回顧」『文章世界』2巻14号、一九〇七年一二月）

この言明から確認されるのは、白鳥がとくに一九〇六年以降の教育界の動き（文部省訓令や特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」）との関連から青年の内面（「青年の頭にある者」）を強く意識していたことである。実際、この発言の直後に発表され、青年の攻撃者たる人物を揶揄的に登場させる「何処へ」は、冒頭でもふれたように主人公の内面の描き出しにおいて注目されていた（「これ実に今日の人間が胸中を代表したものではあるまいか」）。「何処へ」に認められるのは、このように同時代の青年問題をめぐる動向に作中の世界を接続させ、臨場感を高めつつ、健次という青年の内面に読者を深く関与させようとする構成なのである。では「何処へ」は青年の内面をどのように描いたのか。

四

まず注目したいのは、先の桂田博士の発言の直後に置かれる次のような一節である。

（前略）と、演説調で云つた、それが如何にも真面目で心底から憂世の情が溢れてゐるので、健次は気の毒になり、／「ぢや私の雑誌へも、そのお考へを書いて頂けますまいか、私共は人生の経験も乏しんですから、先生方の御意見を窺ふと非常に為になります」と、穏かに殊勝らしく云ふと、博士は顔を軟げて頻りに首肯き、／「つまり何さ、君などはまだ〳〵読書が足らんし世間で苦労をしないから、空論に迷はされるんさ」と時計を見て、（26号30頁）

ここで示されるのは、健次と桂田博士のあいだに、表面的にはともかく、実質的に応答関係が生じていないことである。健次は、自身の浮薄さを難じる桂田博士の言葉に反発するどころか、「気の毒」に思い、桂田博士に「非常に為になります」と「殊勝らしく云ふ」。そこに示されるのは、桂田博士の「憂世の情」にみちた言葉が健次に一向に有効な形で働きかけていないことである。この点は後続のやりとりでさらに強調される。桂田博士は、「君も必ず益する所があるに違ひない」と健次に自身の十年程前の著作「東西倫理思潮」を貸し出そうとし、健次はそれを「無理強いに読まされる苦痛を予想して、暫らく無言」になるが、博士はそれを「所々開けては二三行小声で読み、頻りに首肯てゐる」。この「頻りに首肯てゐる」という博士のしぐさが、先の引用部分、健次が「殊勝らしく」感心したふりを見せたすぐ後のところにも出てくることに注意したい（「顔を軟げて頻りにる首肯き」）。こうした細部の畳みかけが明示しようとするのは、相手の内面への桂田博士の鈍感さ、またはその教導の独善性だろう。

つまりここに描かれるのは、二者間の応答よりもその不発であり、そしてこの事態を把握しているのは、両者のうち健次だけである。桂田博士は当の教導の対象たる青年と有効な呼応関係を結

べていないどころか、そのことさえも把握できていない。ここで健次の恩師たる教育家は、教え子の内面を計測し損ねたまま、自身の教育的効果を過信している、まさに「気の毒」な人物にほかならない。付言しておくと、後日、健次が「東西倫理思潮」を「本箱の上に置いたまゝ手にも取ら」ないままだったどころか、博士との再度の面会の約束さえ忘れてしまうことが語られ（27号100頁）、この教育家の「気の毒」な影響力が改めて確認される。

こうした記述は、青年の内面（「青年の頭にある者」）がいかなる場所として存在するかを効果的に示している。つまりそこは、同時期の教育家の「憂世の情」にみちた言葉にも一向に影響を受けない、固有の秩序によって統御される場所なのである。このような内面の提出が、健次の「浮薄」を難じる桂田博士のふるまい自体の安易さを際立たせることは言を俟たない。こうした内面のありようは次の場面で別の形で示される。

彼れ（健次、木村注）は激烈な刺激に五体の血を湧立たさねば、日に〳〵自分の腐り行くを感じ、青春の身で只時間の虫に喰はれつゝ生命を維いでゐる現状を溜らなく思つた。さうして空想を逞うして色々の刺激物を考へた。普通の麻酔剤は何の効目もない、酒なら焼酎かウヰスキーを更にコンデンスした物、煙草なら阿片、恋なら桜木のお雪や織田のお鶴のやうな女と、甘つたるい言葉を交換しても微酔でもする気遣はない。正義も公道も問題ぢやない。自分を微温の世界から救ひ出して、筋肉に熱血を迸らすか、腸まで蕩ろかす者は、それが自分の唯一の救世主だ。革命軍に加つて爆裂弾に粉砕されやうとも、山賊に組して縛首の刑に合はうとも、結果が何であれ、名義が何であれ、自分を刺激する最初の者に身を投げて、長くても短かくても、或は即刻に倒れてしまつてもよい。（27号94頁）

「何処へ」は「刺激」を渇望する健次の姿を随処に描き込んでいるが、引用部はとくにそれが鮮明な形で示される部分にあたる。引用部のように「刺激」への渇望によって駆動される健次の内面は、「革命軍に加」わるか「山賊に組」するかという区別に意味を見出そうとはしない。この部分が示すのは、健次の内面が、他者の意図や信念を無効化する原理によって深く条件づけられていることなのである。そして「五体の血」「焼酎」「ウヰスキー」「阿片」「筋肉」「爆裂弾」「縛首」といった語彙の連鎖は、この内面に抱え込まれた原理の放縦さをいやましに印象づけている。

このように他者の意図や信念を無効化するような内面のありようへの拘りを集約的に表しているのが、健次と友人の織田が路上で救世軍の演説に立ち会う場面である。この場面で救世軍は「皆様懺悔なさい、神様にお縋りなさい」云々と熱弁をふるうが、周囲の聴衆は救世軍の演説に興味を示さず、「馬鹿ッ」と野次を飛ばしたり、冷笑したり、石を投げたりするにすぎない。しかし健次だけは熱心に聞き入る。この場面は次のように続く。

健次は何も答へず、目を伝道者から離さない。（中略）／かくて凡そ二十分もして、健次は摺り物を女の手から貰つて群衆を分けて出た。

「君は何故あれが面白い」と、織田は長く待たされたので恨めしさうな顔をする。

「面白いぢやないか、彼奴は地球のどん底の真理を自分の口

から伝へてると確信してる。あの顔付を見給へ、自分の力で聴衆を皆神様にして見せる位の意気込みだ。人間はあゝならなくちや駄目だ」

「何にも感心しない君が、何故今夜に限つてあんな下らない者に感心する？」

「さうさ、僕は救世軍にでも入りたいな。心にも無いことを書いて、読者の御機嫌を取る雑誌稼業よりや、あの方が面白いに違ひない、あの男は欠伸をしないで日を送つてるんだ、生きてらあ」

「はゝゝ」と織田は大口を開けて勢無く笑つて、「僕は青年が浅薄な説教なんかして日を送るのが不憫にある（ママ）」（26号46～47頁）

従来この場面については、熱心に演説に聴き入る健次の姿に着目しつつ、健次の深層にある「激越なロマンチシズムの心」、あるいは作者の「すでに棄てたと自認していたキリスト教にたいする郷愁」を見出す指摘が目立つ程度である[10]。しかし以上に見てきた「道徳」の陣営との抗争という文脈を視野に入れるとき、この部分は別の含意とともに浮上するだろう。注意したいのは、そこに内面をめぐる、当時の教育家たちから明確に差異化された認識が刻印されていることである。

ここで健次は確かに救世軍の演説に熱心に聞き入り、「摺り物」さえもらうが、しかし健次と救世軍のあいだに何らかの理解や共感が成立しているわけではないことに着目したい。健次は、演説の内容のためではなく、それとは無関係に、ただこの演説者たちが「地球のどん底の真理を自分の口から伝へてると確信してる」ために注意を向けている。換言すれば、そこで訴えられた救世軍の主張や信念は健次のなかで無意味化されている。むろん救世軍の方はそのような健次の内面を関知できていない。また健次は友人の織田にこの内面を理解してもらおうとするわけではなく、皮肉めいたことを言うだけである。健次、織田、救世軍は同じ場に居合わせ、見かけの上ではある調和的な眺望を構成しているが、現実にはそれぞれが互いに不透明な内面を抱える他人同士として存在しているにすぎない。「何処へ」が拘ろうとするのは、このように同時代の社会の成員たちが、外見上はともかくもその個々の内面において、特定の意志によって一律に統制されることを頑強に拒む形で、それぞれに自律的な意志や欲求を保ちつつ存在するという現実なのであり、この拘りようが、自らの指導によって青年たちの内面を矯正しうると信じる桂田博士のような教育家との明瞭な相違点となることは言を俟たない。

前節でも見たように、このような内面をめぐる表現を理解するにあたって重要なのは、当時の教育界の動きである。先の『新公論』の特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」には、「明治年間の新小説も亦総て之を排斥せざるべからず」（根本正）という桂田博士と同じような文学排撃論から「園芸の趣味を解せよ」（宮川鉄次郎）というやや唐突な提案に至るまで、「～せざるべからず」「～せよ」「～する事」といった助言・命令が多く掲載されている。そして「何処へ」が念入りに確認するのは、青年の内面がそのような言葉の浸蝕を拒む、固有の意志や欲求によって駆動される領域として存在することなのである。すなわち、「何処へ」で行われるのは、青年の内面に向けて自らの教育的効果の

過信しつつ繰り出された「諸先輩」（白鳥「虚無思想の発芽」前掲）の発言群の空転を露呈させ、さらに、そこで一方的に裁断された内面を当事者の視点を回復しつつ再現するという二重の作業なのである。このような企てにこそ、白鳥の試みが当時の文壇動向において意義深い達成となりえた大きな要因があったと考えられる。

五

正宗白鳥が「道徳」の陣営を強く意識する形で創作を行っていたことは別の角度からも指摘できる。留意しておきたいのは、先に見てきた白鳥の表現が、「道徳」への挑戦的な態度を、先行作品よりもいっそう徹底した形で構築したものとして現れたことである。とくにこの点でふれておきたいのは国木田独歩との関連である。[11] 両者の表現に一定の共通性が認められることは同時代にも指摘されており、[12] 白鳥自身もこの時期にくりかえし独歩の小説への敬慕を語っている。[13] しかし両者のあいだには見逃せない相違もあったと考えられる。

まず独歩「帰去来」（『新小説』6年5巻、一九〇一年五月）の次のようなくだりに目を留めたい。

> 野蛮？　野蛮なら何だ。我は野蛮を愛す。世に尽すべき義務とや、人は独立不羈の生活、平和満足而して自由の生活を営むべき権利を有して居るのだ。自から欺いて倫理学とかいふ奴隷の信条を招牌（かんばん）とすべき義務はない！（『国木田独歩全集』2巻、学習研究社、一九六四年、334頁）

ここは、ある教育家が昨今の小説の不健全さを体現する部分として挙げているが、[14] こうした道徳的観念（「倫理学」）への否定的な立場は独歩の他の作品にも共通する。「牛肉と馬鈴薯」（『小天地』2巻3号、一九〇一年一月）では、「忠君愛国」という教育家・経世家たちがたえず強調した価値観の側に立つことのできる「俗物党」たちを前にして「顔に言ふ可からざる苦痛の色」を見せる人物が描き出されているし、「酒中日記」（『文芸界』1巻10号、一九〇二年一一月）では、小学校校長として「忠孝仁義」を説く立場にありながら背徳的な人生を歩まざるをえない男が取り上げられている。確かにここで道徳的観念やその主張者は懐疑の対象である。しかし先の「帰去来」の引用部分のように、こうした登場人物たちが一様に葛藤・苦悩する様子を見せることに注意したい。すなわち、道徳的観念は登場人物たちの内面に強い規制として働いており、その影響力自体は疑われていない。

そのことを視野に入れるとき、白鳥が同じく道徳的観念と対峙する場面を取り上げつつも、独歩の小説とは別種の光景を描いていたことが分かる。先に見たように「何処へ」の主人公は自身の不健全を難じる教育家を前にして反発するどころか、「気の毒になり」、「私共は人生の経験にも乏しいんですから、先生方の御意見を窺ふと非常に為になります」と「穏かに殊勝らしく云ふ」。すなわち、この小説は青年の指導者の道徳的な言葉を反発にも値しないもの、単なる憐憫の対象として捉え直している。ここで描かれているのは、青年の指導者の立場から言えば、もはや青年に葛藤や苦悩を呼び起こすような効力さえも自身に認められないという、独歩の小説に比していっそう過酷な状況である。[15] このように白鳥によって実践されるのは、道徳の鼓吹者の信念を独歩の作

品に比していっそう矮小化された形で提出すること、換言すれば、当初において非道徳的とされた独歩の作品を不徹底なものとして浮かび上がらせるような、さらなる非道徳性を宿した小説の創作なのである。[16]

そしてこのような実践を促したのが、文学を社会の健全なる運営にそぐわない害悪として執拗に意味づけていく、日露戦争後の教育家および教育行政の動向だった。先述のように「何処へ」発表直前の白鳥の発言には、「文相の訓令」「諸先輩の煩悶救治策」を「滑稽に感じた」と語る一節があったが、この「文相の訓令」を契機として小説を有害視する気運がこれまで以上に高まったことは多くの資料によって確認される。たとえば無署名「風俗の取締」（『趣味』1巻4号、一九〇六年九月）は『文芸倶楽部』第一二巻第一一号（一九〇六年八月）の発禁処分について文部省訓令の影響を指摘し、「文部大臣の訓令以来社会主義に関する出版物が急に其の売行を減じたそうだ」と伝えている。また忘憂子「文芸時報」（『読売新聞』一九〇六年一二月一六日）は、帝国図書館での小説の扱いについて、「文相訓令以来、新刊小説は一通り事務員が目を通してから、余りひどくないものを貸すことになつたので、新刊物は少しく貸出しの時日が遅れるといふ話だ」と報じていた。[17] 同時期、多くの学校でも小説の閲覧を禁じる措置がとられたらしく、[18] また帝国教育会という団体は内務省に小説の検閲の強化を働きかけていた。[19] とくに文部省訓令以後に顕在化するこうした動向は、一九〇八年頃から従来にもまして頻繁に文学作品への発禁処分が下されるようになる状況を準備していく動きとして重要だろう。

本論で強調しておきたいのは、この状況が内面の開示に意義を見出していく自然主義興隆期の史的展開を把握する上で大きな意味をもつことである。以上に見てきたように、同時期の教育者および教育行政の動向は、青年の内面を「指導」「救治」の対象として攻撃した。そこに認められるのは、あくまで教える・救う存在として自己規定する形で、つまり自らの正当性が前もって固定される形で他者の内面に対峙しようとする構え方である。こうした状況が当の内面の持ち主たちにどう受けとられたかは、ある雑誌に掲載された次のような投稿文によって窺われる。

> 現在自己指導の下にある学生の、些々たる一片の胸中だも知らざる卿等は、如何に大胆なればとて、果して学生の心理を知り尽せりとは公言し得ざるべし。自己が其指導の任に当りながら、其者の心理的傾向の十一だも究めずして、よく其責を尽したりとするか。（藪紫剣「学生風紀問題の責任者」『新声』13編5号、一九〇五年一〇月）

自然主義の興隆へと至る日露戦争後の数年間は、青年たちがまさにここで語られる、自身の内面（「胸中」）に対する教育家たちの無理解をくりかえし点検し、一方で、この内面を当事者の立場から吟味してくれる試みへの期待を強めていく過程だったと言える。そしてこの期待に応えるべく現れた当時の代表的な成果が「何処へ」だった。むろんこの作品に限るわけではないが、[20] 白鳥の小説が臨場感にみちた内面（「今日の人間が胸中」）の再現に意を注ごうとするのは、まさにこうした青年層の不服を視野に入れるからだった。視点を変えて言えば、青年の風紀の乱れを攻撃し、小説の排撃を唱える当時の教育家たちが図らずも推進していたの

は、このような白鳥の試みこそを痛快なものとして享受するような読者たちの育成なのである。白鳥への青年層の共感は、「健次の性格の一部は、当今教育ある青年の多くにあるそれを捕つた所から、此作を胸にこたへる事なしに読むことは出来ない」（無署名「何処へ」『帝国文学』14巻12号、一九〇八年一二月）という読者の反応からも窺われる。白鳥自身も「一週間の日記」（『文章世界』4巻10号、一九〇九年八月）で、愛読者たちからの「手紙に接し又は来訪を辱ふすることが多い」と述べつつ、「青年諸氏に愛せられるために我々は生活費を得られるのである」と、青年たちからの信頼を自負していた。

六

以上に見てきた正宗白鳥をめぐる動向からも、内面を報告し、吟味し、擁護することが日露戦争後の数年間に興隆する自然主義文学の中心的な関心事となるような必然性があったことが分かる。注意したいのは、この動きが青年の内面を一方的に「救治」の対象として意味づけ、攻撃した、日露戦争以前からの教育家および教育行政の動向への対抗策という側面をもつことである。換言すれば、こうした「道徳」の陣営から発せられる言葉も、たとえ文学に対して敵対的な役回りだったにせよ、当時の文学史的展開の重要な構成部分だったと言える。

同時に指摘しておきたいのは、この事例が、なぜ日露戦争後の数年間の文壇において現実（「自然」）らしさという観点が最たる留意事項となり、たとえば「現実暴露」（長谷川天渓「現実暴露の悲哀」『太陽』14巻1号、一九〇八年一月）という標語が吹聴されるような状況がもたらされるかについて、ひとつの示唆を与えてくれることである。「書きなぐりの気味がある様だが、重もに偽はらざる自己が流露されて居る」（無署名「何処へ」『新公論』24年1号、一九〇九年一月）と評されたように、修辞的洗練を排した、即物的な叙述に徹する作風において注目された白鳥の作品もこうした文学動向の産物だったが、留意しておきたいのは、こうした表現が何を意識しつつ生み出されたかである。ここで「何処へ」が桂田博士という、青年の指導者をもって任じる人物の言動を併置する形でひとりの青年の生を辿るという構成をもつことを想起したい。こうした構成は、教育家たちの言動が当時の文学言語の担い手の想像力を強く拘束するものとして存在したことを示唆しているだろう。

すでに見てきたように、この時期の言論界を特徴づけるのは、青年たちに向けて武士道や「国家の為」という大義の貴さを倦むことなく説いた、桂田博士に体現されるような教育家たちの発言群の隆盛である。この画一的で観念的な言葉と、その当の宛先たる青年たちの生がいかに乖離していたかは、文壇の担い手たちにくりかえし意識されたはずである。それゆえにこそ自然主義運動は、このような言葉に鋭く対立する、「現実暴露」という指針こそに忠実たろうとする言葉、桂田博士の語を借りれば、「国家の為に黙々に附してゐ」られないと危惧させるような言葉をことさらに提出することに意義を見たのではないか。またそれゆえにこの小説言語は、教育家たちの執拗な攻撃の対象だった青年層の読者に強い影響力をもちえたのではないか。当時の文壇の急進的分子たちの実践を支えていた、現実らしさという価値へのあの盲目

的とも言える信頼は、このように青年の指導者をもって任じる年長者たちの画一的で観念的な言葉との緊張関係から把握されなければならない。正宗白鳥の小説が口々に称えられるような日露戦争後の文壇の風景が示しているのはこうした事態なのである。

注

（1）拙論「明治後期文壇における「告白」」（『日本近代文学』81集、二〇〇九年一一月）。

（2）本論でも注目する日露戦争後の青年問題に関しては、とくに岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長」（『思想』512～513号、一九六七年二～三年）に詳細な記述がある。ただこの論に限らず、思想史的・教育学的観点からの検討には文学史的展開への目配りはほとんどなく、本論はこの動向を文学史と密接に関わるものとして改めて把握していきたい。なお文学研究の領域では平岡敏夫『日露戦後文学の研究』（上下、有精堂出版、一九八五年五～七月）のような先例があるものの、今なお当時の青年問題をめぐる展開については未検討の部分が多い。

（3）一九〇六年前後に煩悶青年が争点化し、それと関わりつつ宗教熱および自然主義運動が現れることについて、拙論「明治後期文壇における「告白」」（前掲）を参照されたい。詳述しないが、日露戦争以前に関しては女学生の堕落や藤村操の自殺との関連で青年層の「風紀」「風教」を憂慮する論潮が目立つ。

（4）高島平三郎「文芸と教育」（53号、二月）、宮田脩「文芸と道徳」（同号）、雷軒生「文芸と道徳及び宗教」（54号、三月）、中島徳蔵「文芸と道徳」（55号、四月）等。

（5）長谷川天渓「文芸と道徳」（『太陽』13巻6号、一九〇七年五月）は先の『丁酉倫理会倫理講演集』の文学排撃論への反駁。島村抱月に関しては、特定の小説の閲覧を禁じた帝国図書館（上野図書館）の措置に抗議する「禁閲覧の文学」（『早稲田文学』20号、一九〇七年七月）等。

（6）特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」について、「何れも今日の青年とは心界の異なれる人々の意見なれば、何れも青年の感動を惹起すに足らず」と批判する「出版界」（『読売新聞』一九〇六年八月一一日、署名剣菱）、「文相の訓令の迂愚なるは云ふを待たず、其の他の教育界政治界の重なる地位を占むる人々にも、文相以上に文芸を解するは、一もこれあらざるべし」と述べる「感想録」（『太陽』12巻13号、一九〇六月一〇月）等。

（7）この点は瓜生清「「何処へ」論」（『北九州大学文学部紀要』27号、一九八一年七月）38頁ですでに指摘されている。ただそのような関連だけに留まらないことをここで強調しておきたい。なお山本芳明「「空想」煩悶」する青年」（『研究年報』33輯、一九八七年三月）はこの特集と関連づけつつ、白鳥「独立心」（『新小説』12年5巻、一九〇七年五月）を読解している。山本は、この小説が先の『新公論』の特集に見られるような徳目を身につけた結果、常軌を逸した人間が生まれることを描いたとし、先の特集への「痛烈な諷刺」を見出している。このように教育界との対立という文脈から当時の小説の表現を読み解く視点は同時期の文学史的展開の理解において重要だろう。

（8）とくに日露戦争前後は武士道の論議がさかんとなり、『中央公論』は一九〇四年八月から翌年八月にかけて武士道をめぐる井上哲次郎や大隈重信たちの論説をほぼ毎号にわたって掲載している。『武家時代女学叢書』（全3冊、梅沢和軒校註、有楽社、一九〇五年四月～〇六年一月）、『武士道叢書』（上中下巻、井上哲次郎・有

馬祐政編、博文館、一九〇五年三～一一月）の刊行も話題を呼んだ。この武士道復興をめぐる動きが学生風紀問題の論議とも相補的なものだったことは次のような言明からも裏づけられる。「一方に於て科学実学を奨励し、武士道を鼓吹し、尚武の気風を養成すると同時に、他方に於て一切の小説書類と芝居を撲滅し、似而非哲学を排斥せよ」（先述の特集「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」での根本正〔政治家〕の発言）。

（9）桂田博士が健次による取材の後に文部省に出向くとされていること（「これから文部省へ行かにやならんから」）も重要である。当時教育家と文部省のあいだに密接な関係が築かれていたことは、たとえば無署名「教学界」（『太陽』13巻4号、一九〇七年三月）で、牧野伸顕文部大臣が末松謙澄（政治家）、井上哲次郎、新渡戸稲造（第一高等学校長）、沢柳政太郎といった名士一一名との「審議討究の上」で教育勅語の英訳を作ったと報じられていたことからも分かる。先の桂田博士の描写もこうした状況を読者に想起させたものと推量される。

（10）それぞれ、相馬庸郎「正宗白鳥」（『日本自然主義再考』八木書店、一九八一年）211頁、武田友寿『「冬」の黙示録』（日本ＹＭＣＡ同盟出版部、一九八四年九月）77頁より。

（11）初期の白鳥と独歩との関連については、とくに一柳廣孝「懐疑と断念のあいだ」（『名古屋近代文学研究』6号、一九八八年一二月）に詳細な記述がある。この論でも両者の表現上の関連（とくに小説上での信仰問題の取り上げ方の違い）が検討されているが、ここではそれとは別の視野（「道徳」への態度のとり方）から改めて両者の関連にふれておきたい。

（12）たとえば無署名「小説界」（『早稲田文学』15号、一九〇七年三月）は、「多く短篇の形」をとり、ささいな事象にも「一大事の潜在せることを暗示せん」とする傾向をもつ小説として独歩と白鳥の作品を挙げている。

（13）たとえば以下。「独歩集運命等は三四度を繰り返して読んだのによつて見ると、矢張此等の者が最も好きであつたのだらう」（特集「自分の好む小説」『趣味』2巻10号、一九〇七年一〇月）。

（14）宮田脩（成女学校校主）「注意すべき文芸思潮の一傾向」（『丁酉倫理会倫理講演集』64、一九〇八年一月）はこの箇所を引用しつつ次のように非難していた。「吾人所謂「倫理学とか云ふ奴隷の信条を招牌とする」済輩から見ると、誠に憐むべき嫌ふべき蠟くべき厭ふべき鄙猥残忍の醜事も、彼等（独歩たち、木村注）に在つて、之を自然のもの真実のものとして容認するは勿論、寧ろ推奨して敬意を払うのである」。なおこの記事の発表時期を考慮すれば、宮田は「帰去来」の初出ではなく、これを収録した独歩の作品集『濤声』（彩雲閣、一九〇七年五月）を参照したと推量される。

（15）こうした両者の差異は、たとえば近松秋江による別様の評価からも裏づけられる。秋江は独歩について、「成程悲哀の感も多ければ、人生は果敢ないものとの歎もある。が、皮肉な自己主義なデカダンなノルドウに嘲けられるやうな神経過敏な暗い所は些しもない」（「文壇無駄話」『読売新聞』一九〇八年七月一二日、署名徳田秋江）と述べていたが、一方、白鳥については、「此の人の作物多く自から規矩とする冷静の軌道を逸れて『ざまを見やがれ』の冷罵となる」（「文壇無駄話」、同紙、同年一一月一日、署名同前、傍点原文）と、独歩とは大きく異なる形で評している。

（16）その意味で当時の敬慕の対象だった独歩について、のちに白鳥が次のように述べていることは象徴的である。「独歩は武者小路氏にいろ〳〵な点において、似てゐると思ふ。（中略）道徳的である。理想家である。明るい。（独歩の文章を暗いものと、昔私が思つた

ことのあつたのは大間ちがひだつた。」（傍点木村、「文学雑評」初出不明、『白鳥随筆集』〔人文会出版部、一九二六年三月〕に収録。引用は『正宗白鳥全集』19巻〔福武書店、一九八五年〕71頁。）

(17) 関連記事として島村抱月「禁閲覧の文学」（前掲）も参照のこと。

(18) たとえば宮田脩「文芸と道徳」（前掲）は、「文芸に関する書物は余り読まぬがよい、殊に青年に読ませるな」ということが「折々教育会議の問題にも出で大多数を以て一も二もなく決議されるのを見る」と伝えている。

(19) 『教育時論』第八一二号（一九〇七年一一月）の無署名記事「風紀に関する建議」によると、帝国教育会は一九〇七年一〇月一五日に「風紀に関する建議案」を可決し、内務・文部両大臣に提出する。この建議案には次のような条文が存在する。「新聞、雑誌、小説の類厳密なる検閲をなし苟も風教に害ありと認むべきものに対しては相当の制裁を加ふることを厲行すること」。

(20) 言い添えておくと、「何所へ」に見られる表現と密接に関わる白鳥の重要な作品として『落日』（『読売新聞』一九〇九年九月一日～一一月六日）がある。この作品でも青年とその指導者という、「何処へ」でも見られたのと同じ構図が取り上げられている。ここで青年の指導者に相当するのは代議士の藤崎のことであるが、この人物は当時折に触れて教育問題に発言していた衆議院議員の竹越三叉を強く喚起させる形で造形されており、読者も次のように指摘していた。「それから竹越氏が出て来るのも妙だ。確に竹越氏だらう。（中略）現代を楽観して居る元気のよい人と、暗黒な生を自覚して居る現代の青年この対照は面白い」（池田清「落日を読む」『文章世界』5巻3号、一九一〇年二月）。なお竹越三叉は『太陽』の特集「新進廿五名家」（15巻9号、一九〇九年六月）での「文部大臣適任者」を選ぶ読者投票で沢柳政太郎・新渡戸稲造・高田早苗たちとともに五位で当選している人物である。三叉は一時期ながら『読売新聞』主筆を務めており（一九〇六年一一月～翌年六月）、当時白鳥は同じ新聞の記者として三叉と接していた。したがって白鳥はこうした三叉の社会的な地位をよく知っていたはずである。このように作中世界を当時の言論状況に接続させ、臨場感を高めつつ青年を深く関与させようとする構成は明らかに「何処へ」と通底している。

〔付記〕 引用の際、原則として旧字を新字に改め、圏点などの記号やルビは適宜省略した。「／」は改行。副題は省略。「ヒ」は「こと」とした。なお本論は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（きむらひろし／日本学術振興会特別研究員）